

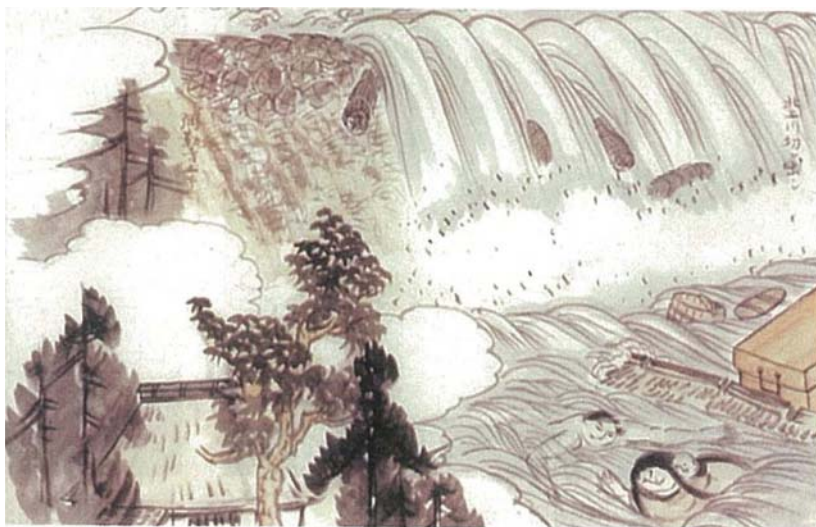
5. 郷土を開く 【「わたしたちの石巻」(平成19年4月1日発行)を抜粋】

1) 北上川の昔と今

航空写真を見ると、現在の仙台平野北部には広々とした水田が一面に広がっています。しかし、今から、約400年ほど前までは、葦のしげった湿り気の多い土地がほとんどで、水田はありませんでした。

また、北上川の川の流れもずっと昔から今のようになっていたわけではありません。昔の石巻の周辺を川がどのように流れていたかはっきりしません。しかし、いろいろな調査や航空写真などから、昔の川の跡を知ることができ、時代によってその流れが変わってきたことが分かります。

今から約400年より前(江戸時代以前)の北上川の流れは、別紙地図1のように迫川と合流していたと考えられます。北上川の周辺に住む人々は、堤防などが整備されるつい最近まで、度重なる洪水に悩まされてきました。



▲現在の仙台平野北部
(追波川河川運動公園付近の水田)



▲北上川河口の葦
(石巻市北上町)

◀享和洪水図〔仙台市博物館所蔵〕
(約200年前の登米地方)

2) お米をたくさん取るために

今から400年ほど前、仙台藩の殿様だった伊達政宗は、米をたくさんとれるようにしようと考えました。

そのため、家来で登米の領主の伊達相模宗直に北上川の改修工事を命じました。宗直は、北上川、迫川、江合川を洪水のおこらない川にし、葦などの生い茂った湿地を新しい水田にしようとしました。また、取れた米は、川を利用して石巻に集め、そこから江戸(今の東京)に積み出して売りさばき、藩の費用にしていこうと考えました。

別紙地図2を見てください。宗直は、5年もかかって、2本になっていた北上川を米谷の近くで一つにまとめ、約6.6Kmの堤防を築きました。

この堤防は、工事をした相模宗直の名前をとって相模土手と呼ばれるようになりました。



▲相模土手〔お鶴明神〕
(登米市中田町浅水付近)

しかし、このような工事をして、川の流が急で、船の交通は難しいものでした。また、川の幅が狭くて洪水も多く、人々の生活はあまり良くなりませんでした。しかし、政宗は北上川改修を諦めませんでした。

3) 川村孫兵衛重吉

川村孫兵衛重吉は、今からおよそ430年ほど前(1574年)、今の山口県で生まれました。幼い頃から大変賢く、色々な学問を学び、毛利輝元という殿様の家来になりました。しかし25才の時、政宗に才能を見込まれ、その家来になりました。政宗に仕えるようになってから、色々な土木工事を行いました。孫兵衛の仕事の中で一番大きいものがこの北上川の改修工事でした。

石巻の恩人川村孫兵衛ゆかりのものは市内にいくつかあります。石巻の釜に住むようになった孫兵衛が、74才で亡くなった後、住んでいた家の後にお寺を建てたのが今の普誓寺です。その墓地には孫兵衛一族が静かに眠っています。



▲川村孫兵衛像(日和山公園)



▲普誓寺(門脇字中浦)



▲孫兵衛が眠る墓地(門脇字新館)

また、その近くには孫兵衛を祀った重吉神社もあります。そのほか千石町には、工事で測量に使った縄などを納めたと言われる縄張神社、住吉公園には孫兵衛の仕事のいつまでも忘れないようにと建てられた石碑もあります。孫兵衛や一族が住んでいた釜地区には、今でも新館、中屋敷、浦屋敷など、家来が住んでいたと思われる地名が残っています。

毎年行われている川開きも、孫兵衛と深い結びつきがあります。川や海で亡くなった人の霊を慰めるための行事でしたが、孫兵衛への感謝の気持ちを表す行事も一緒に行われるようになりました。



▲重吉神社(門脇字新館)



▲縄張稲荷神社(千石町)



▲川開きに行われる孫兵衛船競漕

4) 川村孫兵衛の工事

北上川改修を諦めなかった政宗の命令を受けた孫兵衛は、主に二つの工事を行いました。一つは、北上川の川幅を広くし、堤防を高くして洪水を防ぐこと。そして水の流れを緩やかにして、船の交通を盛んにすることでした。

そのため、別紙地図3のように柳津と飯野川の間の流れを止め（1616年完成）、和湊付近で三つの川（北上川・迫川・江合川）を合流させました。（1623年着工～1626年完成）。また、大森の青ヶ崎に石組みを造り、追波湾に自然に流れていた水の流れを、石巻湾に7分、追波湾に3分とし、石巻に多くの水が流れるようにする事によって、船が航行できるようにしました。（青ヶ崎の石組みについては孫兵衛の工事を引き継いだ仙台藩が行った、という考えが有力です。）

これらの工事では、鹿又から石巻までの川筋は、新しく掘った物ではなく、昔からあった川の流れを利用したり、付け加えたりしたものと考えられます。また、わざわざ蛇行させた（今の開北付近）のは、流れを緩やかにして、船の航行を助けるためと考えられています。



▲青ヶ崎の石組み



▲「青ヶ崎の石組み」のある場所

5) 工事の工夫や苦労

孫兵衛は、測量のために木を切り倒して見通しを良くし、近くの山に登って土地の様子を調べました。

また、夜には竹竿に提灯をくくりつけ、土地の高さを調べたり、松明や蝋燭で川の深さを図るなど、苦労を重ねました。

孫兵衛が工事の指図をしている様子が描かれた版画が残されています。

この絵から次のような事が分かります。

- ・つるはしや鍬で土を掘っている。
- ・モッコで土を運んでいる。
- ・働く人がわらじを履いている。
- ・鉢巻きを巻いている。
- ・川でないと掘っている。

つまり、人力で掘っている様子が分かります。

この工事では、川を掘るのに『箱堀り』という方法が使われたと考えられます。これは川筋にするところに大きな長方形の掘をいくつも掘り、上流から一気に水を押し流す方法です。これにより長方形の壁を水の流れで崩し、川筋を作っていく事が出来ます。

孫兵衛は、工事の設計や指図をするばかりではなく、働く人の体の具合を聞いたり、工事の苦労



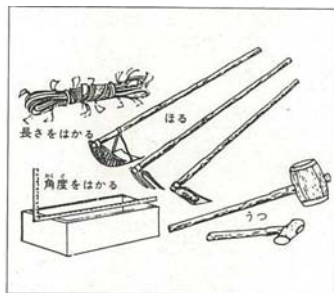
▲孫兵衛工事監督の図

〔鹿又の八雲神社所蔵〕

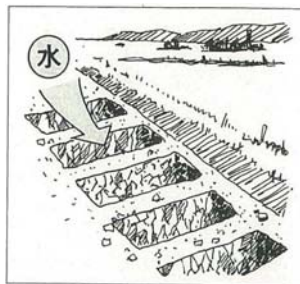
を話し合ったりしました。

孫兵衛の苦労は、それだけではなかったのです。これほどの大工事をするのですから、たくさんのお金がかかりました。しかし、工事をするために用意されたお金は十分ではありませんでした。

そこで、孫兵衛はあちこちのお金持ちの所へお金を借りに出かける事も度々ありました。



▲工事に使った道具



▲孫兵衛が考えた箱掘りの想像図

6) 工事によって発展した石巻

孫兵衛の工事が完成すると、周辺の様子は今までとは違ってきました。これまでは葦のしげった湿り気の多かった土地は、洪水の心配が少なくなり、どんどん干拓されるようになりました。北上川・迫川・江合川の三つが流れる仙台平野の北部では、新田開発によって米がたくさん取れるようになりました。

また、これまで小さな漁村であった石巻は港町として栄えるようになりました。孫兵衛の工事によって、北上川の流れは緩やかになり、黒沢尻（岩手県北上市）と石巻の間を船（平田船）で行き来する事が出来るようになりました。さらに、北上川・迫川・江合川を利用して船で米を石巻に集めるようにしました。石巻に集められた米は千石船に積み込まれ、江戸（今の東京）に運ばれました。



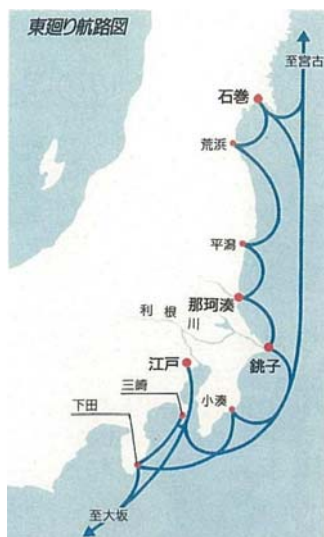
▲北上川を往来した平田船（模型）
〔北上市博物館所蔵〕

このようにして、石巻は、

「三十五反の帆を巻き上げて

行くよ仙台石巻」

と謡われるようになり、川岸にはたくさんの米蔵が建ち、大きな船



▲千石船の東回り航路図



▲石巻と江戸（深川）の間を航行した千石船
〔岩手県奥州市江刺区 愛宕神社所蔵の絵馬〕



▲仙臺石巻湊眺望の全図〔石巻文化センター所蔵〕(約150年前)

今の住吉小学校の体育館がある付近にも米蔵があったということです。

さらに北上川の船の交通を利用して、石巻と日本各地を結びつけるのにも役立ちました。千石船は、江戸、上方（今の大阪、京都）の文化や人の交流を始め、色々な物の行き来が大量に出来るようになりました。また、北上川を上り下りした平田船は、石巻へは米や豆などを、上流に向かう時には、古着、魚、塩、薪など生活に欠かせない品物を運び、人々の生活に役立ちました。

このように孫兵衛の工事は、石巻はもちろんのこと、多くの人々の生活を豊かにするとともに、地域の発展に大変役立ちました。

千石船で石巻から江戸に運ばれた各地の特産品



▲米俵



▲木材



▲タバコの箱



▲紅花の餅

千石船で江戸から石巻に運んできたものの一部



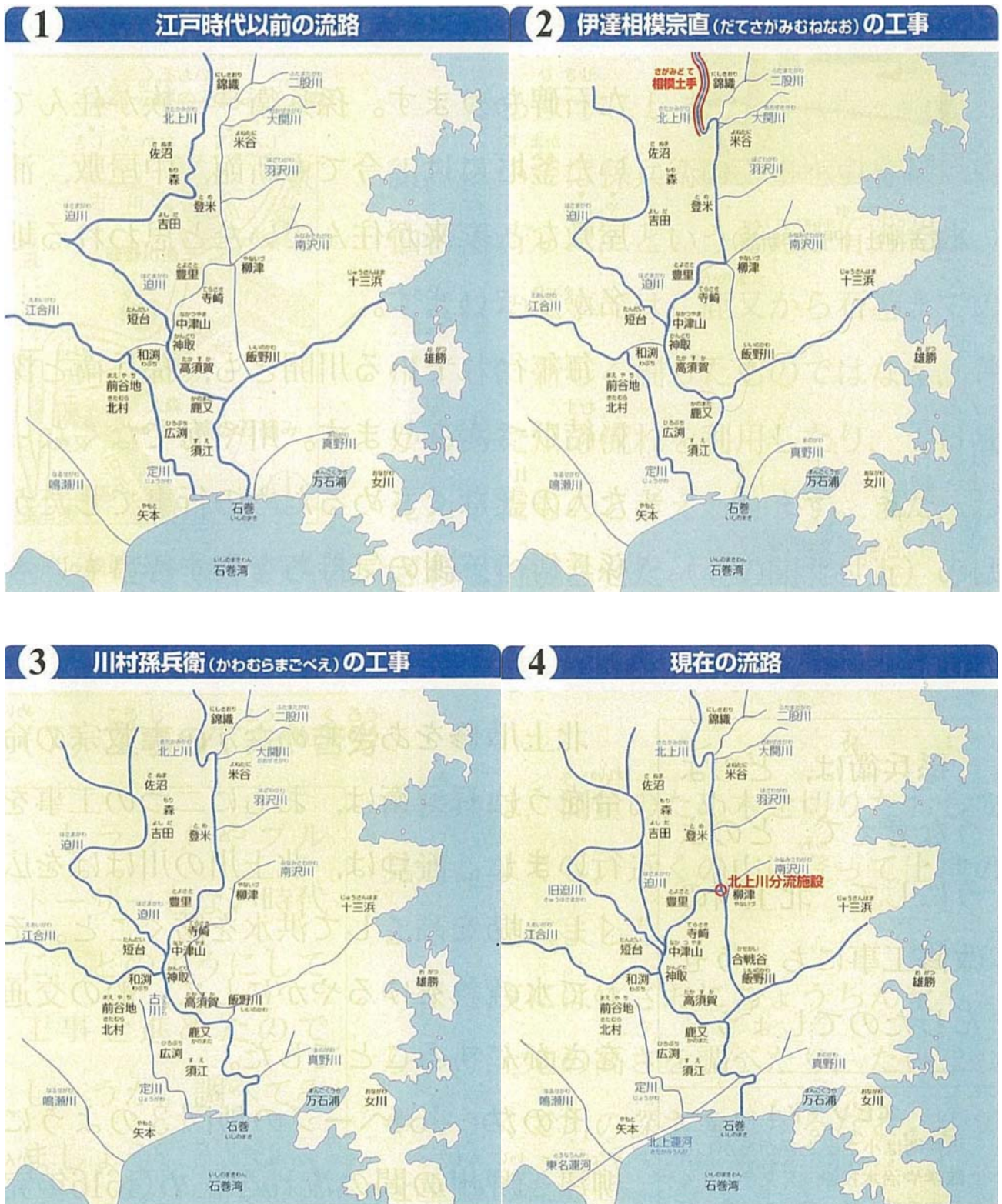
▲塩俵（主に瀬戸内産）



▲木綿の古着

江戸時代以前から現在までの北上川の流路

(2006年「いしのまきふるさと地図帳」より)



※江戸時代の流路については、柳津～飯野川間は流れていなかったとの考え方もあります。(河北町誌より)